広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	道元研究 ： 弘法救生(ぐほうぐしょう)を目指して
Author(s)	宇野, 正三
Citation	ぷらくしす , 24 : 65 - 72
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53872
URL	https://doi.org/10.15027/53872
Right	
Relation	

道元研究―弘法救生を目指して

A Study of Dōgen: Aiming at Spreading Buddhism and Saving Sentient Beings

宇野正三
Shozo Uno

この論考は、日本曹洞宗の開祖、道元（1200－1253）の主著『正法眼蔵』等を通して、禅師の仏教思想の究明を目的とする。

万象は永遠界の現れ

道元は森羅万象の世界の根源に無限・永遠の世界があり、現象世界は永遠界の顕現であることを説く。この真実に目覚めたのが仏祖であるとする。「諸仏諸祖出興之道（諸仏諸祖が出現する出来事は）、それ朕兆已前なるゆえに（諸現象が成立する以前の無限の永遠界に目覚める事態であるので）、旧窠の所論にあらず（迷妄に繋縛され、相対的諸物に著する論の及ぶ所ではない。」（「夢中説夢」、『道全』第1巻、295頁。）この世の根底は絶対の永遠界で、真如とも言い、それを根拠として、悟りも成り立つのである。「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して（山水は無限界に立脚していて）、究尽の功徳を成ぜり（仏の光輝を発している）。空劫已前の消息（万象の世界成立以前の風光）なるがゆえに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆえに、現成の透脱なり（永遠と一体の現象としての山水は、得道した仏の悟りの世界＝真如が現れ出た物である。山も水も自然的存在の本体の現成である。万物の根元＝永遠界から現象界が成立し、それは永遠の今の働きである。万象の根基に基づく本来の自己は時間的転変を超越していて、永遠的存在である）。」（「山水経」、『道全』第1巻、316頁。）万象界は個々別々の存在から成っているので、空間・時間的限定のある世界で、それを生み出す超越的世界は限定を持たない存在なので、無源・永遠である。

永遠界は仏性（仏としての性質）とも称される。「釈迦牟尼仏言く、一切衆生は、悉く仏性有り。如来は常住にして、変易有ること無し（無限の存在としての仏＝法身仏は、永遠の存在で、変化しない）。」（「仏性」、『道全』第1巻、14頁。）道元は此の道理を更に徹底し、次のように断言する。「悉有の言は、衆生（生きとし生けるもの）なり、群有（諸存在）なり。すなわち悉有は仏性なり、悉有の一悉を衆生という。」（「仏性」、『道全』第1巻、14頁。）万物は根底に於いて仏性であるので、道元は本体（仏性）と現象（万象）が一如であることを強調して、「悉有は仏性」と表現した。衆生は万物の中の一種である。「仏性空なる

ゆえに無という。」（「仏性」、『道全』第 1 巻、22 頁。）仏性は無限で、限定相を持たないので、空とも無とも表現出来る。「いわゆる正伝しきたれる心というは、一心一切法、一切法一心なり。」（「即心是仏」、『道全』第 1 巻、57 頁。）道元は仏性を心とも称する。無限の存在は限定する言葉で表現・把握できないので、不可得な存在である。「いわゆる世界は、十方みな仏世界なり、非仏世界はいまだあらざるなり。（世界は仏性の現れであるので、法身仏に包含されない諸存在は無いのである。」（「古仏心」、『道全』第 1 巻、91 頁。）

「第十二祖馬鳴尊者、十三祖のために仏性海をとくにいわく、＜山河大地、皆依って建立す、三昧六通、茲に由って発現す（自然は仏性に依って存在する。これを自覚することが悟りである。得道によって、安定した寂静の境地と神通力が得られる）＞。」（「仏性」、『道全』第 1 巻、18 頁。）

「一塵をしるものは尽界をしり、一法を通ずるものは万法を通ず。万法に通ぜざるもの、一法に通ぜず。」（「諸悪莫作」、『道全』第 1 巻、351 頁。）個々の物と万物は根源の無限の永遠界に媒介されて、一体の関係を成しているので、一に通ずることは多にも通ずるのである。所謂、世界は一即多の関係にある。「おおよそ聞法は、ただ耳根・耳識の境界のみにあらず、父母未生已前、威音以前（太古の最初の仏である威音王仏出現以前、天地開闢より前）、乃至尽未来際、無尽未来際にいたるまでの挙力・挙心・挙体・挙道をもて聞法するなり（仏法を聞いて、理解するとは、聴覚の対象のみでなく、天地未分の無限・永遠の世界も、力・心・身体・言葉の全てによって覚知することである）。」（「無情説法」、『道全』第 2 巻、8 頁。）

「法性を無量劫という（法性は無限の時間＝永遠である）。」（「法性」、『道全』第 2 巻、28 頁。）「即今の遮裏は法性なり（時間的今の内面＝根元は法性である）。」（「法性」、『道全』第 2 巻、28 頁。）「この宗旨は、これ仏教なり。諸仏ならびに仏土は、両頭にあらず（仏と真如は一体で、別のものではない）、有情にあらず・無情にあらず、迷・悟にあらず、善・悪・無記等にあらず、浄にあらず・穢にあらず、成にあらず・住にあらず・空にあらず、常にあらず・無常にあらず、有にあらず・無にあらず、（他者に対する）自にあらず（悟りは真如を自覚し、対立を超える智慧である。相対的見方を脱した絶対的認識である）。」（「十方」、『道全』第 2 巻、93－94 頁。）「自己とは、父母未生已前の鼻孔なり（我々の本来の面目は、この世が生まれる前の永遠界に根差した自己である。）。」（「十方」、『道全』第 2 巻、95 頁。）

「＜釈迦牟尼仏、大衆に告げて言く、若し諸相は非相と見れば、即ち如来を見る。＞」（「見仏」、『道全』第 2 巻、98 頁。）差別（対立、相違）と平等（同一）を一体と見るのが道眼である。無限定相（法性、平等面）と限定相（諸現象、差別面）は一体であるので、双方を統一的に見ることが覚者の見解である。「＜大証国師曰く、牆壁瓦礫、是れ古仏心なり（覚者から見れば、塀・壁・かわら・小石も仏性の現れであるので、根底的に同一性を成している。得道者（悟りを成就した者）は万物との一体性を了知している）。＞」（「発菩提心」、『道全』第 2 巻、161 頁。）「仏法の大道は一塵のなかに大千の経巻あり、一塵のなかに無量

の諸仏まします。」（「発菩提心」、『道全』第 2 巻、163 頁。）

仏教は有限即無限、一瞬即永遠を説く。「＜釈迦牟尼仏言く、明星出現の時、我と大地有情と同時に成道す（明けの明星＝金星が現れて、釈尊が正覚を開いた時、自分のみならず、自然も心あるもの一切が同時に仏性の活現であることを自覚した）。＞」（「発菩提心」、『道全』第 2 巻、164 頁。）真如に無知なるものとしての無明が菩提＝般若に転じられれば、一切が仏性の現出であることが体得されるから、有限物は無限の仏の世界（法身仏）の限定作用により生じると了解される。「一念の深広無涯際なるがごとく、一草一木・一石一瓦の深広も、無涯際なり。」（「発菩提心」、『道全』第 2 巻、167 頁。）物質も精神も根底は無限界である。

仏教は因縁界のみでなく、それを超えた非因縁界も説く。「たとい因縁生法をあきらむとも、さらに非因縁生法をあきらむべし。たとい仏祖辺をあきらむとも、さらに仏祖向上をあきらむべし（有為＝因縁で出来ているもののみでなく、無為＝因縁で出来ていないものも把握しなければならず、仏祖の境地を曉っても、更にその境界を深化、発展させるべく修行に奮励すべきである）。」（「自証三昧」、『道全』第 2 巻、200 頁。）インドの説一切有部の論書は次のように説いている。「二法有り。謂わく、有為法と無為法。（中略）若し法にして、因縁和合作用に依属するものなれば、是れ有為の義にして、若し法にして、因縁和合作用に依属せざるものなれば、是れ無為の義なり。」[1]

「仏と人と、身量はるかにことなり、人身ははかりつべし、仏身はついにはかるべからず（人は有限、法身仏としての仏は無限であり、人智では絶対に仏身は計り知れない）。」（「袈裟功徳」、『道全』、第 2 巻、321 頁。）有限物は無限的存在の現れであるが、互いに根本的に異なっている。両者は一体ではあるが、決して同一ではないことを我々は承知すべきである。人間は絶対者である神仏そのものには成れないのである。

只管打坐

「諸仏如来、ともに妙法（仏法）を単伝して（師から弟子に伝えて）、阿耨菩提（悟り）を証する（達成する）に、最上無為の妙術あり。これ、ただほとけ、仏にさずけてよこしまなることなきは（仏が授ける正しい内容は）、すなわち自受用三昧（自ら悟りの寂静の境地を享受することが）、その標準なり（修行の目標となるものである）。この三昧に遊戯するに（楽しみ味わうには）、端坐参禅を正門とせり（規矩に則った坐禅が悟りへの正しい方法である）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、460 頁。）「この法（仏性、真如、法性、法身仏）は、人人の分上にゆたかにそなわれりといえども（各人に本質的に充分具わっているけれども）、いまだ修せざるにはあらわれず、証せざるにはうることなし（坐禅修行を行って、悟りを達成し、仏性に目覚めなければ自己の本分は実現しない）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、460 頁。）

「予（道元）、かさねて（更に）（中国の）大宋国におもむき、知識（仏法に見識を有する良師）を両浙にとぶらい、家風を五門にきく（浙江の東西にある臨済宗、曹洞宗、潙仰宗、雲門宗、法眼宗の五家の諸寺を遍参した）。ついに太白峰の浄禅師（天童山景徳寺の如浄禅師）に参じて、一生参学の大事、ここにおわりぬ（印可＝悟りの証明・認可を受け、大事了畢した）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、461 頁。）「それよりのち、大宋紹定（宋の時代の年号）のはじめ、本郷（日本）にかえりし、すなわち弘法救生をおもいとせり（仏法を弘め、一切衆生を救いたいと決意した）、なお重担（重い荷物を）をかたにおけるがごとし。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、461 頁。）「もし人、一時なりというとも（僅かの時間でも）、三業（身・口・意の三つの行い）に仏印を標し（悟りを現し）、三昧に端坐するとき（精神を統一し、正しい姿勢で坐禅する時）、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる（全世界が仏の光芒を呈し、悟りの様相を現す）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、462 頁—463 頁。）では、悟ると我々はどうなるのであろうか。「＜仏（釈尊）言く、（中略）阿耨多羅三藐三菩提（正覚）を得るに因るが故に、常・楽・我・浄、具足して有り（つねに晏如とした、清らかな金剛不壊の心が具わる）、即ち是れ無上大般涅槃（この上ない安楽な境地）なり。＞」（「発菩提心」、『道全』、第 2 巻、340 頁。）

道元は修行法として、何故、何よりも坐禅を高調するのか。「おろかならん人、うたごうていわん、仏法におおくの門あり、なにをもてかひとえに坐禅をすすむるや。しめしていわく、これ仏法の正門なるをもてなり。とうていわく、なんぞひとり正門とする。しめしていわく、大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、又三世の如来、ともに坐禅より得道せり、このゆえに、正門なることをあいつたえたるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖（インドや中国の禅匠たち）、みな坐禅により得道せるなり、ゆえに、いま正門を人天にしめす。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、464 頁—465 頁。）「それ、修・証はひとつにあらずとおもえる、すなわち外道の見（仏教以外の見解）なり。仏法には、修証これ一等なり（修行と悟りを一体と見る）。いまも証上の修なるゆえに（我々の本体は仏性であり、それに立脚して修行しているから）、初心の弁道（修行）すなわち本証の全体なり（弁道の全体が我々の面目である仏性の顕現である）。かるがゆえに、修行の用心をさずくるにも、修のほかに証をまつおもいなかれ、とおしう。直指の本証なるがゆえになるべし（正しく、本来、我々は仏としての性質を具えているからである）。すでに修の証なれば、証にきわなく（悟りの深さの進展に終わりはない）、証の修ならば、修にはじめなし（仏性を有しているから、修行の初め以前から仏の立場が成立している）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、470 頁。）「しるべし、修をはなれぬ証を染汚せざらしめんがために、仏祖（仏や祖師は）、しきりに修行のゆるくすべからざるとおしう（我々の心は常に同一状態ではなく、退歩しているか、進歩しているかなので、修行を怠らず、向上に努めなければならないと仏祖は教えている）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、471 頁。）

我々の魂は不滅であるとの説があるが、これは悟りとどのような関係があるのであろう

か。「いわく（私＝道元は言う）、かの外道の見は、わが身、うちに一つの霊知あり、かの知、すなわち縁にあうところに、よく好悪をわきまえ、是非をわきまう、痛痒（痛みと痒み）をしり、苦楽をしる、みなかの霊知のちからなり、しかあるに、かの霊性は、この身の滅するとき、もぬけてかしこにうまるるゆえに、ここに滅すとみゆれども、かしこの生あれば、ながく滅せずして常住なり、というなり。かの外道が見、かくのごとし。しかあるを、この見をなろうて仏法とせん、瓦礫をにぎって金宝とおもわんよりもなおおろかなり、癡迷のはずべき、たとうるにものなし。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、472 頁―473 頁。）魂が不滅であることと仏性が永遠であることは異なる。不滅とは時間的に永続することで、永遠とは時間的変化を超越していることを意味する。悟るとは、永遠の存在を自覚することであって、魂の不滅とは永久のことで、仏教で説く悟りとは無関係である。

さて、道元は、仏法が広まれば、安泰の世が実現すると言う。「国家に真実の仏法弘通すれば、諸仏・諸天ひまなく衛護するがゆえに、王化太平なり（仏法が普及し、成道の人が増えていけば、この世が極楽・浄土に近づいて行く）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、476 頁。）また、道元は末法の時代には悟りがないとの説も否定する。「大乗実教、正・像・末法をわくことなし、修すれば、みな得道すという（真実の仏法は、正法・像法・末法の時代の良し悪しによって、悟ることが出来ないという区別はせず、修行すれば全ての人が証道しうると説く）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、476 頁。）「人みな般若の正種ゆたかなり（悟りを開く素質は豊かに有している。）。ただ承当することまれに、受用することいまだしきならし（仏性に目覚めることは稀で、達道の生き方を縦横に展開することは容易でない）。」（「弁道話」、『道全』、第 2 巻、480 頁。）

道元が悟りを「身心脱落」と説くのは、師の如浄から受用した教えである。「先師（如浄）衆に示して云わく、坐禅は身心脱落なり。」（「永平広録」、『道全』第 3 巻、206 頁。）「仏道をならうというは、自己をならうなり。自己をならうというは、自己をわするるなり。自己をわするるというは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるというは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。」（「現成公案」、『道全』第 1 巻、3 頁。）我々は己と一つである仏性を自覚することによって、時間的現象存在の自己と永遠の存在との一体性を体得し、迷妄の自己から解脱する。この事態を身心脱落と謂う。この悟りによって、万物も仏性の顕現であることを理会し、万象が仏界に住することが了解される。

坐禅によって悟ることが出来るのは、我々が仏性を有しているが故に、坐禅自体が、本来仏である自己の現れであり、それを仏行（仏としての行い）と言い、この仏行に専心することで、必ず自己の本質への気付きが可能であると道元は考える。故に、作仏（仏に成ろうと）を図るなど、あれこれ思量（思いを巡らすことを）せず、只管坐禅すれば、悟りは実現しうるとする。

「仏土というは、眼睛裡なり（仏界は、我々の内面＝根源に存在する）。」（「光明」、『道全』第 1 巻、140 頁。）「尽十方界は是れ自己なり（悟れば永遠界・現象界が自己と一体であるこ

とが体感される)。」(「光明」、『道全』第1巻、142頁。)宋国の文人蘇軾は自己の悟りの境地を次の詩に表している。「渓声便ち是れ広長舌／山色清浄身に非ざること無し／夜来八万四千の偈／他日如何が人に挙似せん(谷川の音は獅子吼＝仏の説法、山も仏の清らかな身体である、昨夜来の多くの仏の教えを、後日、人にどのように説こうか)。」無限の仏性を自覚した蘇軾にとって、自然の根底に仏性を感得して、山川草木が、恰も仏の姿や仏の説法のように思われたのである。

諸物は時間である

「いわゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。」(「有時」、『道全』第1巻、240頁。)「この尽界の頭頭物物を、時時なりと覿見すべし(我々も含め、世界中の個々の物を時間と窺い見るべきである)。」(「有時」、『道全』第1巻、241頁。)「いわゆる、山をのぼり、河をわたりし時に、われありき、われに時あるべし。われすでにあり、時、さるべからず、時、もし去来の相にあらずば(有為転変を超越していれば)、上山の時は有時の而今(永遠と一体の今)なり。時、もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり(変化の面からみると、山河は現象としての時間である)。」(「有時」、『道全』第1巻、241頁—242頁。)諸現象は永遠と時間の統一である。「松も時なり、竹も時なり。時は飛去するとみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時、もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし(時間を過ぎ去るものとのみ見れば、過去、現在、未来の間に断絶が生じる)。有時の道を経聞せざるは、すぎるとのみ学するによりてなり(存在物＝時間が永遠の現成であるとの深い真実を弁えないのは、時間の変化の面のみを学んでいるからである)。要をとりていわば、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時時なり、有時なるによりて吾有時なり(諸現象は我も外物も時間的に断絶しながら繋がっている)。有時に経歴(次々と現象は様相を変ずる)の功徳(働き)あり、いわゆる、今日より明日へ経歴す、今日より昨日に経歴す、昨日より今日へ経歴す、今日より今日に経歴す、明日より明日に経歴す、経歴は、それ時の功徳なるがゆえに。古今の時、かさなれるにあらず、ならびつもれるにあらざれども、青原も時なり、黄檗も時なり、江西も石頭も時なり。(時間＝現象は絶えず変遷し、不連続の連続をなしている。)」(「有時」、『道全』第1巻、242頁。)「尽界は不動転なるにあらず、不進退なるにあらず、経歴なり。経歴は、たとえば春のごとし、春に許多般(多く)の様子あり、これを経歴という(春は時間的に様々の様相を呈するが、これは春が時間的に経歴しているのである)。」(「有時」、『道全』第1巻、244頁。)「山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず、山海の而今に時あらずとすべからず(永遠が山海となって時間として現れている)。時もし壊すれば、山海も壊す、時もし不壊なれば、山海も不壊なり。この道理に明星出現す、如来出現す、眼睛出現す、拈華出現す。これ時なり、時にあらざれば不恁麼なり(自然も悟りも時間が有ってこそ成立する。時間が無くなれば全現象も無くなる)。」(「有時」、『道全』第1巻、245頁。)釈尊は明けの明星を見て達道した。眼睛

は禅宗の眼目のこと。また、釈尊が霊鷲山で弟子たちの前で、無言で、金波羅華をつまんでひねったところ、摩訶迦葉のみが釈尊の意向を理解し、破顔微笑した。釈尊は迦葉が悟りの心を把握したとして、「吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相無相・微妙法門有り。摩訶迦葉に付嘱す」と語り、道心を相伝するよう（次々と伝えるよう）委嘱した。これにより、迦葉は禅宗の第一祖とされる。（ただ、この拈華微笑の説話は中国での創作と考えられている）。

道元は時間の諸瞬間の前後が断絶しており、一刻一刻を絶対の存在と考える。「たき木、はいとなる、さらにかえりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取（誤った見解を正しいと考えることを）すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して（固有の在り方に於いて、真如に基づいている）、さきあり、のちあり。前後ありといえども、前後裁断せり（時間的前後の間に断絶がある。しかし、法性の媒介によって、過去、現在、未来が連続していて、諸現象は不連続の連続をなしている）。灰は灰の法位にありて、のちあり、さきあり。かのたき木は、はいとなりぬるのち、さらにたき木とならざるごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死となるといわざるは、仏法のさだまれるならいなり、このゆえに不生という。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり（仏教の定まった教えである）、このゆえに不滅という。生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり。たとえば冬と春とのごとし。冬の春となるとおもわず、春の夏となるといわぬなり。」（「現成公案」、『道全』第 1 巻、3 頁—4 頁。）仏教の理説では、諸現象の法性＝本体は永遠であるので、その面からみれば、生まれることも死ぬことも無いので、不生不滅である。万物の根源は永遠・無限の存在であるので、各時間的変化の様相のそれぞれが絶対性を持ち、生死も四季もそれぞれが代替不可能の価値を持っているのである。時間の各瞬間が無限の深みを持っており、絶対的存在なのである。「おおよそ発心・得度（菩提心を起こすことと菩提の成就）、みな刹那生滅によるものなり。もし刹那生滅せずば、前刹那の悪、さるべからず、前刹那の悪、いまださらざれば、後刹那の善、いま現生すべからず。この刹那の量は、ただ如来ひとり、あきらかにしらせたまう（御存じである）。」（「発菩提心」、『道全』第 2 巻、335 頁—336 頁。）「しるべし、今生の人身は、四大五蘊（四大—地・水・火・風—万物の要素／五蘊—色＝物質・受＝感受作用・想＝表象作用・行＝意志作用・識＝認識作用—心身の要素）、因縁和合して、かりになせり（真如に対する仮の存在としての仮有を現出している）、八苦（生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦）つねにあり、いわんや刹那刹那に生滅してさらにとどまらず。」（「出家功徳」、『道全』第 2 巻、274 頁。）

仏典は説いている。「一切は皆、是れ刹那性なるが故に。」[2]「体は実に恒有にして、増無く、減無し。但、作用に依りて有と説き、無と説く。諸々の積聚の事（諸個物）は、実有の物に依りて、仮に施設する有（永遠の法体に依って、仮に設けられた存在＝仮有）なるをもて、時に有にして、時に無なり。」[3]即ち、体＝法体（法性・無為）は増減の無い無限・永遠の存在である。その作用として種々の仮有が現象し、これらには有無の変化がある。仮有は

刹那滅で、不連続であるが、法体に媒介されて連続を成す。

即今こそ永遠への門である。「生死のほかに、ほとけをもとむれば、ながえをきたにして、越にむかい（車を北に向けて、南方に行こうとすることであり）、おもてをみなみにして（顔を南に向けて）、北斗（北斗星）をみんとするがごとし。」（「生死」、『道全』第 2 巻、528 頁。）「この生死は、即ち、仏の御いのちなり。これをいといてすてんとすれば、すなわち仏の御いのちをうしなわんとするなり。」（「生死」、『道全』第 2 巻、529 頁。）我々が生きるとは仏性が生きているのである。換言すれば、我々は仏の命を生きているのである。そのことに覚醒することが悟りである。生死の只中に於いてこそ永遠界に目覚めることが出来る。

禅宗は、教外別伝、不立文字を宗旨とすると言われる。併し、道元は経典も大切にするし、浩瀚な書『正法眼蔵』を著わしているように、文字による説法も重視する。経典では、『法華経』を最も尊重し、遷化に至る病中でも同経典を誦した。「＜釈迦牟尼仏、普賢菩薩に告げて言く、若し是の法華経を受持し、読誦し、正憶念し（常に心に掛け）、修習し（得道すべく修行に努める）、書写する者有らば、当に知るべし、是の人は則ち釈迦牟尼仏を見たてまつり、仏口より此の経典を聞くが如し。＞おおよそ一切諸仏は、見釈迦牟尼仏、成釈迦牟尼仏するを、成道作仏というなり（釈尊の境地と冥合することによって成仏しうる）。」（「見仏」、『道全』第 2 巻、102 頁。）

道元は、真摯に伝法に努め、救世を願って、53 年の生涯を全うした。

註

・道元からの引用は、酒井得元・鏡島元隆・桜井秀雄監修『道元全集』全 7 巻、春秋社、1988 年-1993 年を使用。引用箇所は、本文中の引用文の後に、引用著作名に続いて『道全』と略記し、巻数名、頁数を示した。

・大正蔵経とあるのは、大正新脩大蔵経の略である。

・引用に当たり、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。

・論文中の漢字の振り仮名は筆者が付した。

・論文中の丸括弧内の説明は筆者が付した。

1 『大毘婆沙論』、大正蔵経、第二十七巻、392 頁下。

2　同書、310 頁中。

3　同書、395 頁下—396 頁上。